

英雄が救い出す相手は……

小島ゆかり ◎歌人

辻原登 ◎作家

長谷川權 ◎俳人



半歌仙

『ドラゴン退治の巻』

昨年十二月二十一日に神奈川近代文学館で開かれた「かなぶん連句会」は、三人の選者が作った六句に続く句を参加者が考え、半歌仙十八句の連句を完成させるといふ催し。参加者が一体となって楽しんだ当日の模様をレポートする。

長谷川 歌仙は三十六句から成りますが、半歌仙はその半分の十八句で構成されます。表六句は出来上がっていますので、発句の辻原さんからつけ筋をお願いします。

辻原 毎年二月に福井県で左義長まつりが開かれます。昼はきれいな装束に身を包み、三味線や太鼓の音で舞い踊る子どもたちを乗せた山車が二十数台、町を練り歩きます。その姿は、神々の子どもたちのようです。夜になると、九頭竜川の河川敷に巨大などんが積み上げられ、一斉に炎が燃え上がる。神々がいるとしたら、この光景は空の上からより下から見上げたほうが素晴らしいだろう。そんな思いから「神々も降りてみあぐるどんどかな」と詠みました。

長谷川 脇が「年を寿ぎ雪は逆巻く」です。雪が降りしきっている景色と新年の雪を合わせました。

小島 「雪は逆巻く……」の句の「逆」の字を見たら、「最上川逆白波の立つまでにふぶくゆふべとなり」にけるかも」といふ斎藤茂吉の歌が浮かびました。茂吉は

半歌仙『ドラゴン退治の巻』

【初折の裏】

- 発句 神々も降りてみあぐるどんどかな登 (新年・春)
脇 年を寿ぎ雪は逆巻く 權 (新年・春)
第三 味噌汁に卵を落とす春の朝 ゆかり(春)
四 ドラゴン退治にいざ出陣 登 (雑)
五 月光に囚はるる身を嘆くなり 權 (秋・月)
六 サックスに酔ふ秋のジャズフェス ゆかり(秋)

【初折の裏】

- 初句 少女らのまぶしき脚が葡萄踏む 一郎 (秋)
二 単線に乗り通学していた 乃里子(雑)
三 待つ人のゐるうれしさよおでん鍋 幸子 (冬)
四 向ひの犬のけたたましさよ 敬子 (雑)
五 香港を大きくゆらすサングラス 一郎 (夏)
六 焼け焦げている夢の残骸 甘酢 (雑)
七 青空に宇宙ステーション周回し 貴稔 (雑)
八 ぼつんと一軒ラーメン屋さん 乃里子(雑)
九 大漁旗かかげてもどる男衆 忠子 (雑)
十 春満月を機上の窓に 敬子 (春)
十一 花の宴何はなくともワンチーム 哲男 (春花)
折端 山笑う日の母の弁当 三枝 (春)

素晴らしい歌人であると共に、食いしん坊でもあり、晩年の歌には大好きな味噌汁に卵を落として滋養をとるといふ歌もあります。そこから第三を「味噌汁に卵を落とす春の朝」としました。

辻原 味噌汁に落とした卵が、龍の目のように見えてきました。ドラゴンというと、英雄がお姫様を救い出す話が多いので、その英雄を僕自身になぞらえてみました。「ドラゴン退治にいざ出陣」。

長谷川 第五句は「月光に囚はるる身を嘆くなり」。ギリシャの神話には、カシオペア王妃が美を誇ったばかりに、王女アンドロメダを海の魔ものの生贄に差し出すことになり、鎖でつながれた姫を英雄ペルセウスが助けに来るといふ話がありました。そのような神話的情景をイメージしながら詠んだ句です。

小島 ドラゴン退治からお姫様へ……と、男性二人が壮大な物語に酔っているようなので、少し熱を冷まさなければ、という気持ちがありました。笑。姫は、囚われてうつらうつらしているうちに夢を見ます。気づくと千年くらい経っていて、そこはジャズフェスティバルの会場だったと想像しました。「サックスに酔ふ秋のジャズフェス」とつけました。